サッカーの攻撃における 3人のコンビネーションプレーの指導法の開発 ― 第3の動きのプレーパターンについて ―

松本　光弘・鈴木健太郎*

Developing a Coaching Method of the 3-players' Combination Attacking in Soccer. ― Play pattern of the third man move ―

MATSUMOTO Mitsuhiro and SUZUKI Kentaro*

The purpose of this study is to develop an efficient coaching method for 3-players' combination attacking including the third man move.
The first attacker with the ball passes to the second attacker, who directly passes to the third attacker with the third man move. The first attacker needs to think in advance in order to move the ball to the third attacker by using the second attacker.
The second attacker has to know his role as receiving a pass from the first attacker and give it to the third with one touch.
The third attacker has to think ahead and find a good timing to receive a ball from the second attacker at the right movement.
This attacking pattern will be coached in 2 steps.
Firstly, players tries the combination with hands and heading to understand the pattern easily, then plays with feet.
The first attacker instructs the second attacker to pass to the third at the moment of passing. This pass is named as 'anticipation pass'.
The second attacker calls for a ball from the first attacker, and passed it to the third with one touch. This pass is named as 'mirror pass'.
The third attacker instructs the first attacker to pass to the second and calls for a ball from him with one touch in an appropriate timed movement. This movement is named as 'the third man move'.

Ⅰ　緒　言

近年のサッカー競技はレススペース，レスタイム，アンダープレッシャー，アンダースピード，クイックディシッジョン等あらゆる面で早さが要求されてきている。特に，守備面で組織化が進み，これまで攻撃の中心となって活躍してきた一握りの高いパフォーマンスを持ったトッププレーヤーの活躍のみでは到底強固な，組織立った守備陣を打ち破ることはできなくなってきている。

そのような中にあって攻撃チームに求められるのは，攻撃のためのスペースを如何に意図的に作り出し，それを如何にタイミング良く使って攻撃を有利なものとし，確実なものとするかが最重要課題であると考える。この考えのおおもとは攻撃

*筑波大学体育研究科

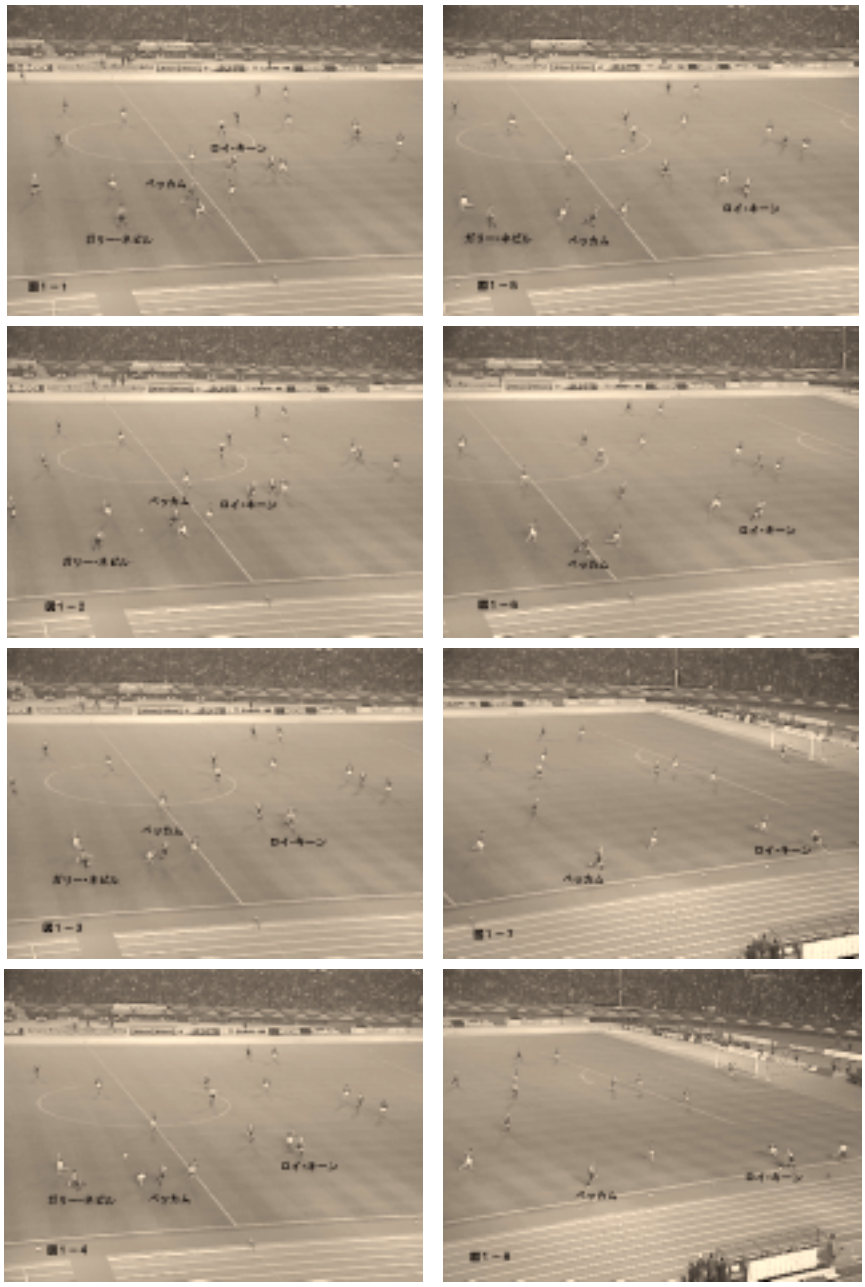

図1-1〜1-8

側には先手，能動的，イニシアティブという有利さがあり，守備側には後手，受身という不利さがあることから導き出されるものである。サッカー競技は手でボールを扱うバスケットボールやハンドボールのように正確なボール扱い，あるいは確実なボール保持はできない。しかし，近年のボールを扱うスキルの向上は目覚しく，中でもワンタッチプレーの正確さは一時代前には考えられないような精度と状況判断の早さで進歩を示している。このことについてイングランドサッカー協会

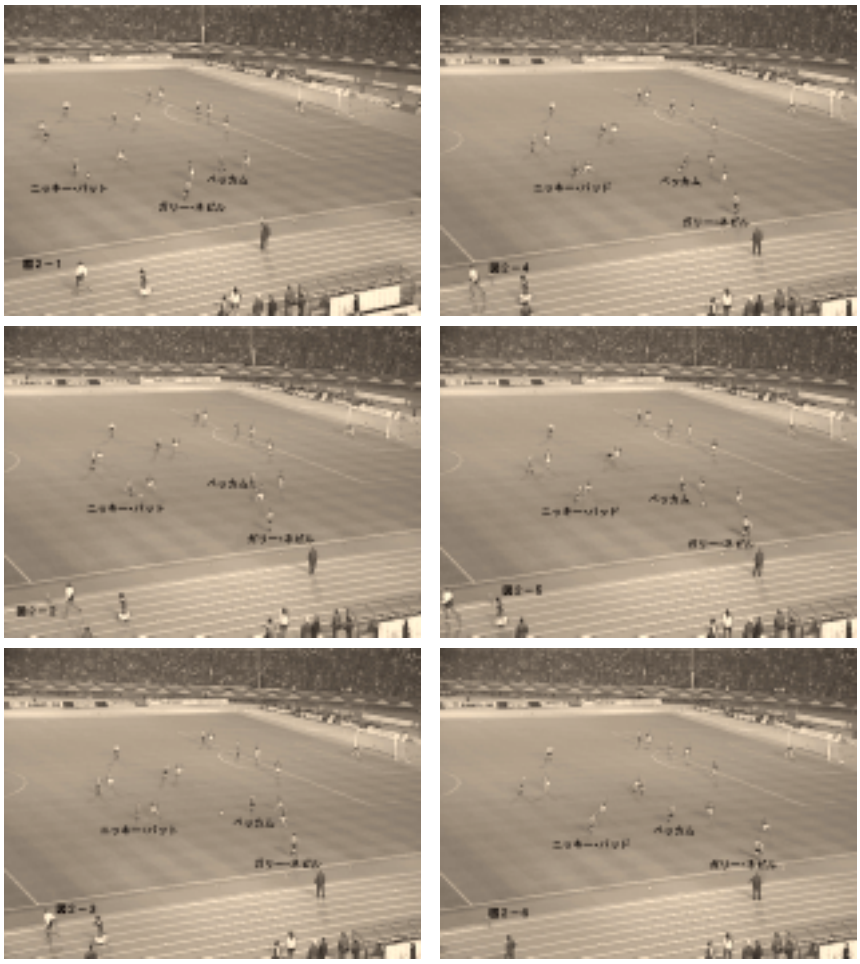

図2-1～2-6

の前コーチングダイレクター，チャールズ・ヒューズはハイレベルのサッカーでワンタッチプレーは攻撃のためのスペースを作り，プレーヤーに自信と決断力をもたらすといっている[1]。このような中にあって攻撃における3人のコンビネーションプレーは相手守備陣を打ち破る大きな威力となると共に，学習しなければならない重要課題でもある。コーチングの対象となる攻撃の一般的プレーはボールを持った第1アタッカーとボールを受ける第2アタッカーの2人のコンビネーションプレーが中心であるが，これに加えて他の第２アタッカーを装ったおとりの動き（デコイラン）をするプレーヤーによる守備陣の撹乱やチーム全体での攻撃戦術であるサイドチェンジなど攻撃の戦術課題は他にも多くある。ここで取り挙げる3人のコンビネーションプレーは第3の動きと呼ばれているもので第2アタッカーが行うワンタッチプレーを中心とした攻撃パターンである。通常，この攻撃パターンは単にウォールパス（壁パス）あるいはワンツーリターンと英語圏では呼ばれている[注1]が，ウイル・クーバーは彼のコーチングビデオの中でワンスリーパスと表現している[8]。これについて松本は第1アタッカーのパスを一つ先を読んだパス，第アタッカーのパスをミラーパス[注1]，第3アタッカーの動きを第3の動きと表現している[3]。

この第3の動きの攻撃パターンは少なくとも12歳から14歳（中学生年代）には習得されているべき攻撃戦術である考えられるが，残念ながら現在，この年代のサッカープレーヤーがこの攻撃パターンを会得している可能性は低い。その理由と

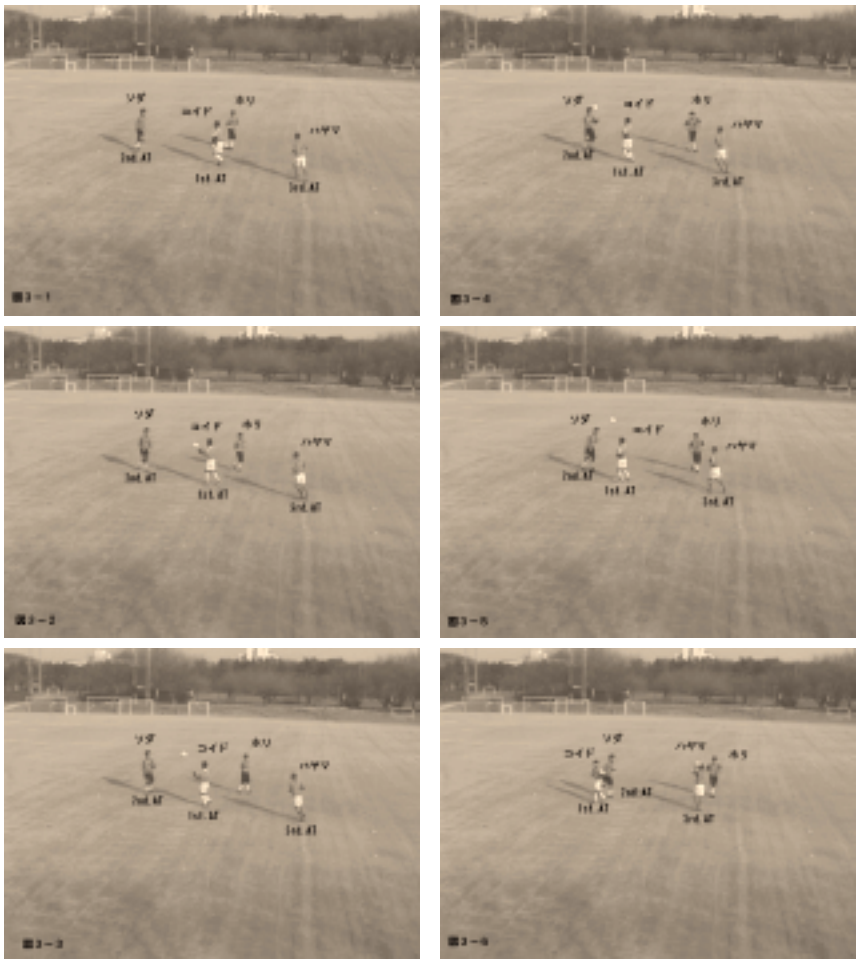

図3-1～3-6

して永年体育系大学の入学者のサッカー部に入部してくるサッカーを専門とする学生を指導してきての実情把握からの判断である。そこでこの攻撃パターンをより理解しやすく，単純に，効果的に，確実に指導する方法を確立したいとこれまで指導の中で創意工夫してきた。これまでにこの攻撃パターンを指導する過程で，如何に効果的にこの攻撃パターンをプレーヤーに学習させ，彼らのアイディアを引き出すかの指導法の開発を考案し，改良し，実践することを中心課題としてきた。その結果，指導後のプレーヤーのこの攻撃パターンのゲームでの応用やプレーヤー自身からの理解でき，実践で応用できるようになったとの報告などからその効果が確実であると確信し，ここにその指導方法を提示することとした。

このプレーパターンの考え方は他のボールゲームでもあり，バスケットボールで笠原はこれを第3点の利用と呼んでいる[2)]。

このプレーパターンを実際のゲームの中で見ると多くのトッププレーヤーによって演じられている。**図1-1～1-8**，**図2-1～2-6**は1999年11月30日，東京国立競技場で行われたトヨタカップ，マンチェスターユナイテッド対パルメイラス戦でマンチェスターユナイテッドが示した2つのプレーパターンのケースである。まず**図1-1～1-8**に示すものはサポートプレーによる3人の攻撃パターンである。前半開始1分17秒，第1アタッカーのベッカムは相手第1ディフェンダーにプレッシャーをか

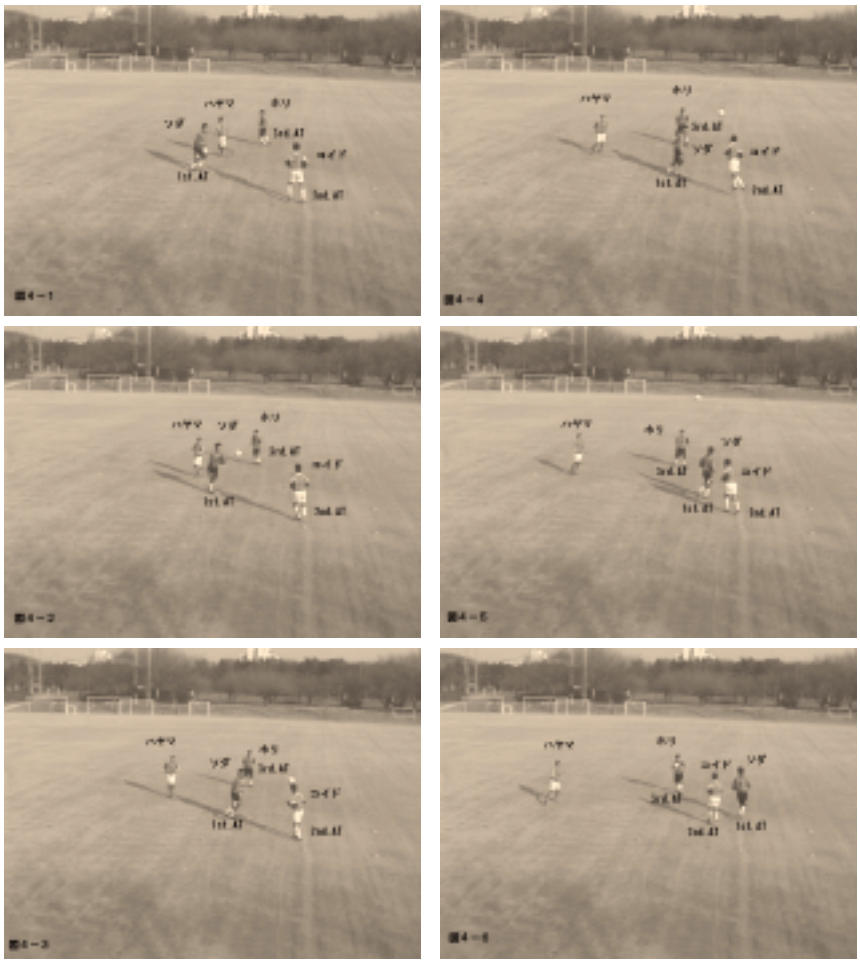

図4-1～4-6

けられ前方にプレーができない。そこに第2アタッカーのガリー・ネビルがサポートのポジション入る（**図1-1**）。この第2アタッカーにパスされるのを予測し，第3アタッカーのロイ・キーンは中央から右前方に動き出している。そしてベッカムからガリー・ネビルへパスされ，ガリー・ネビルはワンタッチプレーで前方のオープンスペースへ走しるロイ・キーンへ突破のパスを送っている（**図1-2～1-6**）。第3の動きをしたロイ・キーンは相手ディフェンスラインの外側で確実にボールを保持し，攻撃の基点をつくっている（**図1-7～1-8**）。

図2-1～2-6に示すものはポストプレーによるワンタッチの3人の攻撃パターンである。前半開始14分11秒，マンチェスターユナイテッドの右サイドの攻撃である。第1アタッカーのニッキー・バッドがボールを持っているが，比較的狭いスペースで，パルメイラスのバランスが取れた守備に遭遇している。そこで前方に位置する味方ベッカムは一度ボールを受け，相手守備陣を自分に引き付けてから外側に第3の動きをするガリー・ネビルにワンタッチでボールを渡して，局面を打開し，攻撃を展開している。

この2つのプレーパターンからわかるように，第1アタッカーの考え方，すなわち第2アタッカーを介して第3アタッカーへ一つ先を読んだパスを送ること。第2アタッカーの考え方，すなわち第1アタッカーからパスを受けて，第3アタッカーへワンタッチでパスを展開すること。そして第3ア

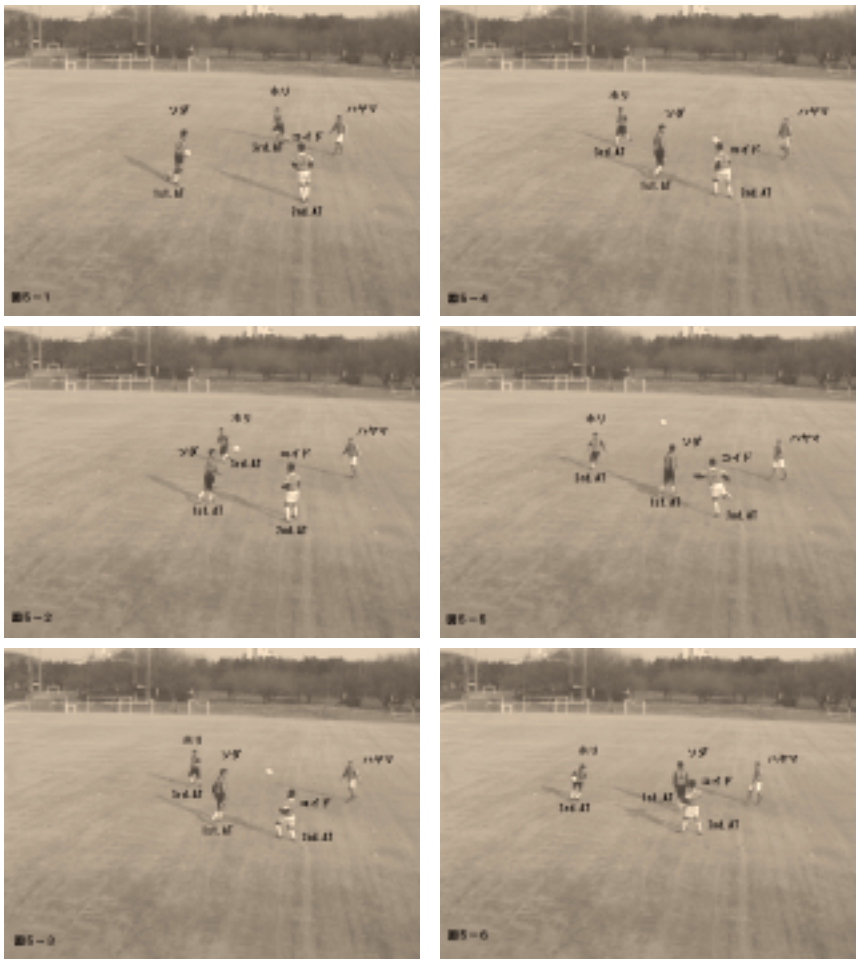

図5-1～5-6

タッカーの考え方，すなわち第1アタッカーが保持しているボールを第2アタッカーを仲介してオープンスペースでパスを受けること。これらがそれぞれのプレーヤーの立場でその役割を瞬時に状況判断し，プレーできるようになることが必要である。このプレーパターンは第1アタッカーがプレッシャーを受け，パスできない場所へボールを展開することができる。また，相手守備陣を意図的に集中させ，そこからボールを展開することができる。さらに守備陣の間隙をぬっていく，いわゆるスルーパスが通しやすくなることや時には相手ゴール前のクロスで大きく逆サイドにボールを送り，折り返す（笠原がいう第3点の利用）ところに第3アタッカーが走りこんでシュートするなど時間の確保やスペースの利用などに使われる。

このプレーパターンを一度会得したプレーヤーたちからサッカーが一段と楽しくなったとの報告を多く受けている。本来であればこの指導方法の効果についてデータをとり，検証すべきであるが，今回は指導方法のみを資料として提示するものである。

II　研究の進め方

1．モデルの映像撮影

映像対象：第20回トヨタカップ
マンチェスターユナイテッド（イングランド）対パルメイラス（ブラジル）
日時場所：1999年11月30日（火曜日）国立霞ヶ

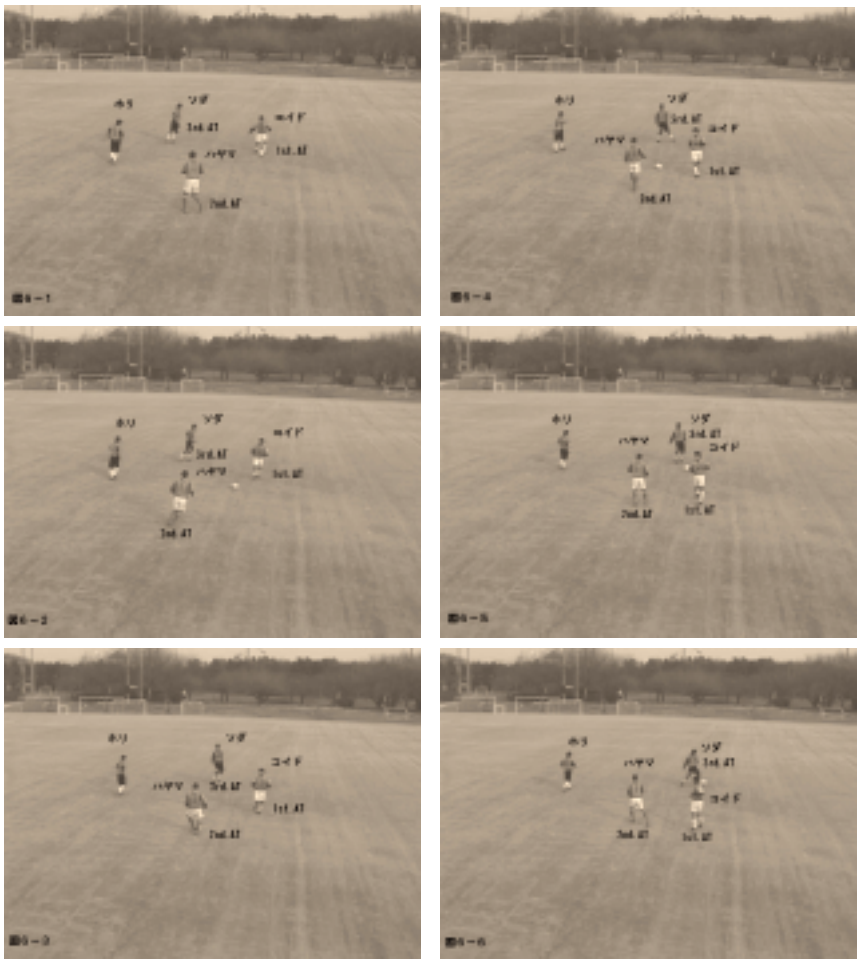

図6-1～6-6

丘競技場
試合結果：マンチェスターユナイテッド
1―0（1―0）パルメイラス
撮 影 者：（財）日本サッカー協会科学研究委員会メンバー（当時）
撮影場所：国立霞ヶ丘競技場　5階ブース
撮影器具：デジタル　ビデオカメラ　レコーダー

2．指導対象の映像撮影

指導対象：1999年度筑波大学体育専門学群サッカーコーチング演習（3年次37名）受講生
日時場所：1999年12月3日（金曜日）筑波大学第1サッカー場
撮 影 者：筑波大学修士課程大学院生
撮影場所：地上約5mにカメラ設定
撮影器具：デジタル　ビデオカメラ
レコーダー（SONY　DCR-TRV900）

3．画像処理

1）DV映像をパイオニア製DVDレコーダーPRV-R55とそれをコンピュータ制御するソフトで必要な動画を編集（編集ソフト：Soccer coaching system）
2）1）の映像をソニー社製VAIO　PCV-R73Kに取り込み静止画像として処理,（編集ソフト：DVgate Motion, DVgate Still）
3）静止画像に必要事項を書き込む（編集ソフト：DVgate Still）
4）プリントアウト

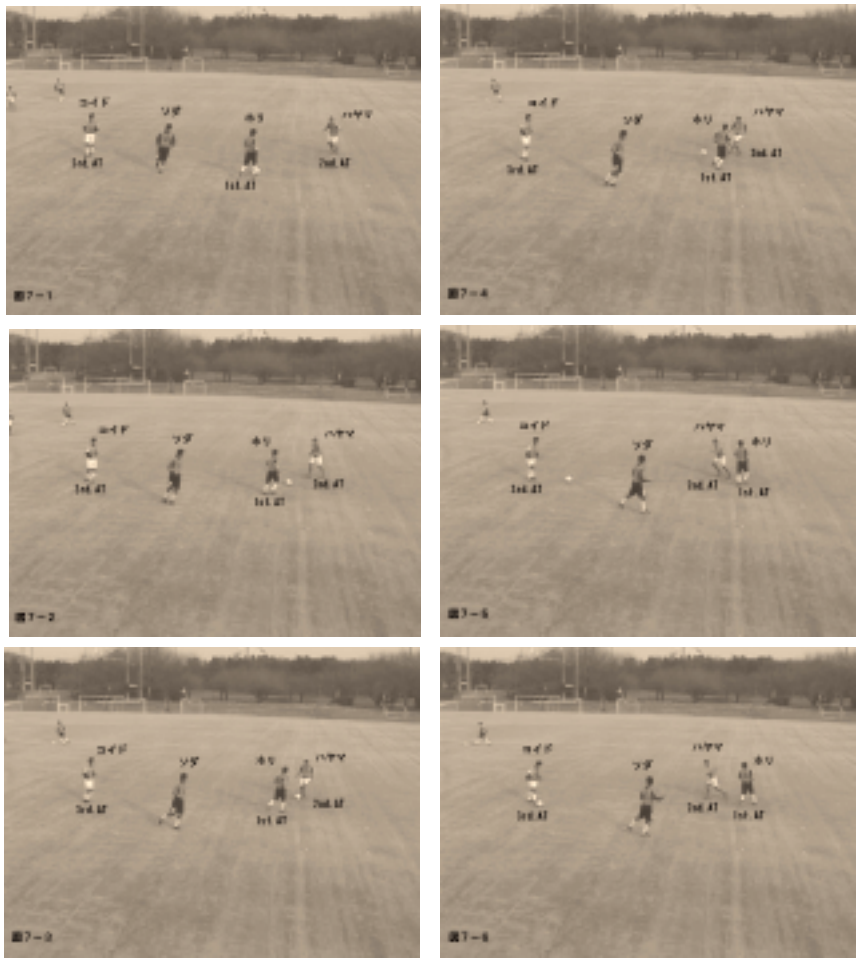

図7-1～7-6

Ⅲ　指導の実際

1．第1アタッカーの一つ先を読んだパス（ハンドボールとヘディング）

ボールを手で保持したコイド（第1アタッカー）はソダ（第2アタッカー）に，ハヤマ（第3アタッカー）へ渡せ！！と指示して，ヘディングできるボールを渡す：**図3-1～3-3**。ボールを受けたソダ（第2アタッカー）はヘディングでハヤマ（第3アタッカー）へボールをパスする：**図3-4～3-5**。ハヤマ（第3アタッカー）はボールをキャッチする：**図3-6**。今度はハヤマが第1アタッカーとなり，これを繰り返す。

2．第2アタッカーのミラーパス（ハンドボールとヘディング）

ソダ（第1アタッカー）が手でボールを保持している：**図4-1**。コイド（第2アタッカー）がよこせ！！といってボールを頭にもらい，ヘディングでホリ（第3アタッカー）へパスする：**図4-2～4-5**。ホリ（第3アタッカー）はボールをキャッチする：**図4-6**。今度はホリが第1アタッカーとなる。ホリ（第1アタッカー）以外の人が第2アタッカーとなってボールをもらってミラーとなり第3アタッカーにパスし，これを繰り返す。

3．第3アタッカーの第3の動き（ハンドボールとヘディング）

ソダ（第1アタッカー）が手でボールを保持し

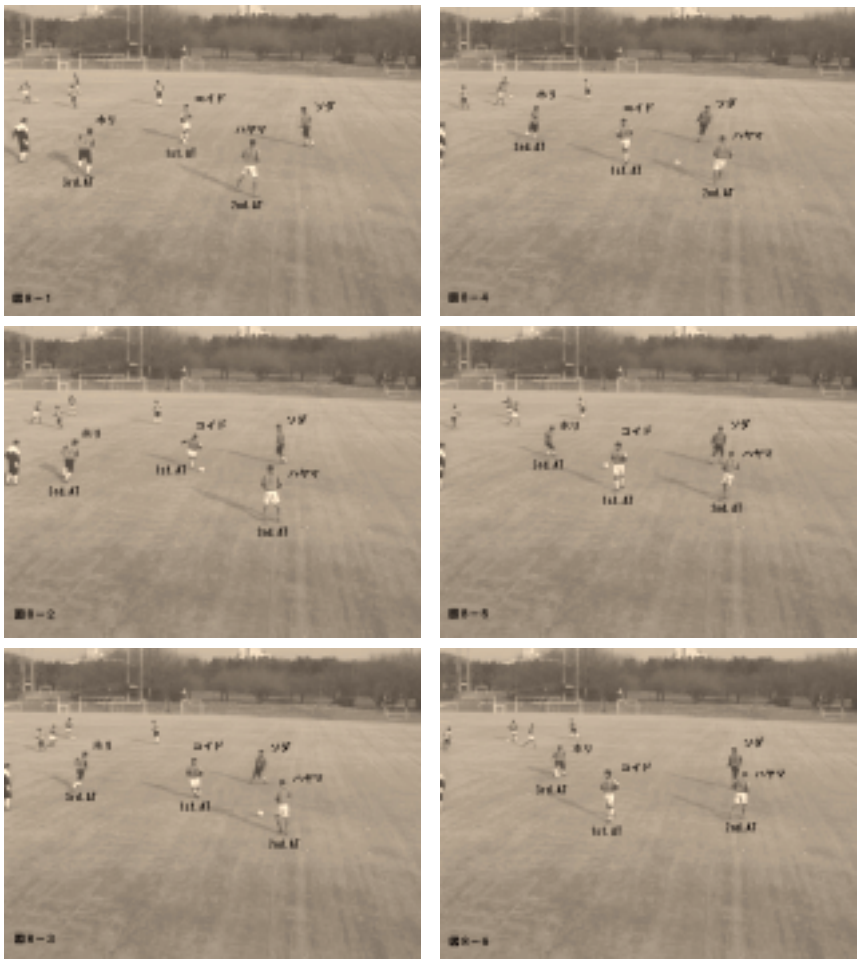

図8-1～8-6

ている：**図5-1**。ホリ（第3アタッカー）はソダ（第1アタッカー）に，コイド（第2アタッカー）にあてろ！！と指示する：**図5-1**。ソダ（第1アタッカー）はコイド（第2アタッカー）へヘディングできるボールを渡す：**図5-2～5-3**。コイド（第2アタッカー）はヘディングでボールをもらいたいスペースに動いているホリ（第3アタッカー）にパスする：**図5-4～5-5**。ホリ（第3アタッカー）はコイド（第2アタッカー）からボールをヘディングでパスしてもらう：**図5-6**。今度はホリが第1アタッカーとなる。ホリ（第1アタッカー）以外の人が第3アタッカーとなって他の誰かを介して第3の動きをしてボールをもらい，これを繰り返す。

4．上記3ステップを統合して行う（ハンドボールとヘディング）

上記の第1アタッカーの一つ先を読んだパス，第2アタッカーのミラーパス，第3アタッカーの第3の動きを全員がそれぞれの役割を引き出し合い，手とヘディングでパスし合う。

5．第1アタッカーの一つ先を読んだパス（フットボール）

ボールを足で保持したコイド（第1アタッカー）はハヤマ（第2アタッカー）に，ソダ（第3アタッカー）へ渡せ！！と指示して，適当な強さと場所にボールをパスする：図6-1～6-2。ボールを受けたハヤマ（第2アタッカー）はワンタッチでソダ（第3アタッカー）へボールをパスする：

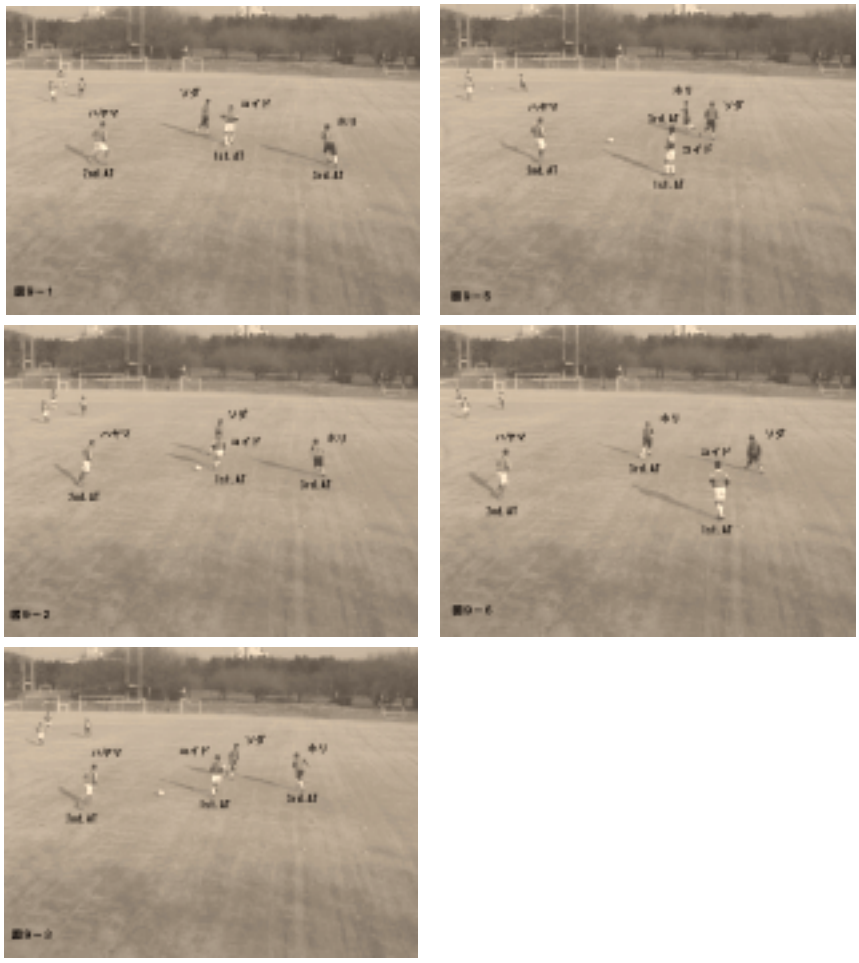

図9-1～9-6

図6-3～6-5。ソダ（第3アタッカー）はボールを受け，保持し，今度は第1アタッカーとなり，これを繰り返す。

6．第2アタッカーのミラーパス（フットボール）

ホリ（第1アタッカー）が足でボールを保持し，ハヤマ（第2アタッカー）がよこせ！！といってボールをもらおうとしている：**図7-1**。ハヤマ（第2アタッカー）はボールをもらい，ワンタッチでコイド（第3アタッカー）へボールをパスしている：**図7-2～7-5**。コイド（第3アタッカー）はハヤマ（第2アタッカー）からのボールを受けている：**図7-6**。今度はコイドが第1アタッカーとなる。コイド（第1アタッカー）以外の人が第2アタッカーとなってボールをもらってミラーとなり第3アタッカーにパスし，これを繰り返す。

7．第3アタッカーの第3の動き（フットボール）

コイド（第1アタッカー）が足でボールを保持している：**図8-1**。ホリ（第3アタッカー）はコイド（第1アタッカー）に，ハヤマ（第2アタッカー）にあてろ！！と指示する：**図5-1**。コイド（第1アタッカー）はハヤマ（第2アタッカー）へ適当な強さのパスを渡す：**図8-2～8-3**。ハヤマ（第2アタッカー）はワンタッチでボールをもらいたいスペースに動いているホリ（第3アタッカー）にパスする：**図8-4～8-5**。ホリ（第3アタッカー）はハヤマ（第2アタッカー）から第3の動きをしてボールをパスしてもらう：**図8-6**。今

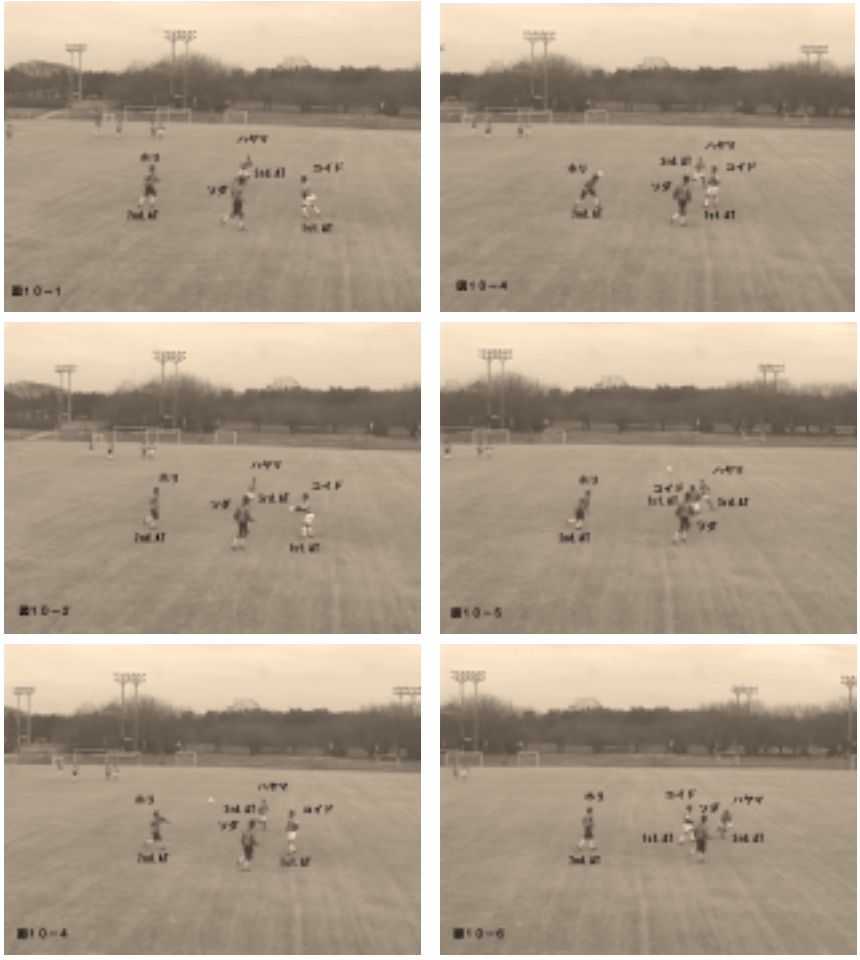

図10-1～10-5

度はホリが第1アタッカーとなる。ホリ（第1アタッカー）以外の人が第3アタッカーとなって他の誰かを介して第3の動きをしてボールをもらい，これを繰り返す。

8．上記3ステップを統合して行う（フットボール）

上記の第1アタッカーの一つ先を読んだパス，第2アタッカーのミラーパス，第3アタッカーの第3の動きを全員がそれぞれの役割を引き出し合い，足でパスし合う。

コイド（第1アタッカー）がボールを保持し，第3の動きをするホリ（第3アタッカー）へハヤマ（第2アタッカー）を介してパスを送ろうとしている：**図9-1**。ハヤマ（第2アタッカー）はコイド（第1アタッカー）からボールをもらってミラーとなって，第3の動きをするホリ（第3アタッカー）にパスしている：**図9-2～9-5**。第3の動きをしたホリ（第3アタッカー）はソダとクロスしてソダの前にいたスペースでボールを受けている：**図9-6**。

9．攻撃方向に移動しながら行う（ハンドボールとヘディング）

第1アタッカーの一つ先を読んだパス，第2アタッカーのミラーパス，第3アタッカーの第3の動きをハンドボールとヘディングで行う。

右方向に攻撃している。コイド（第1アタッカー）がボールを保持している：**図10-1**。ホリ（第2アタッカー）が後方から近づきミラーとなって，前方に第3の動きをするハヤマ（第3アタッカー）にヘディングで突破のパスを送っている：

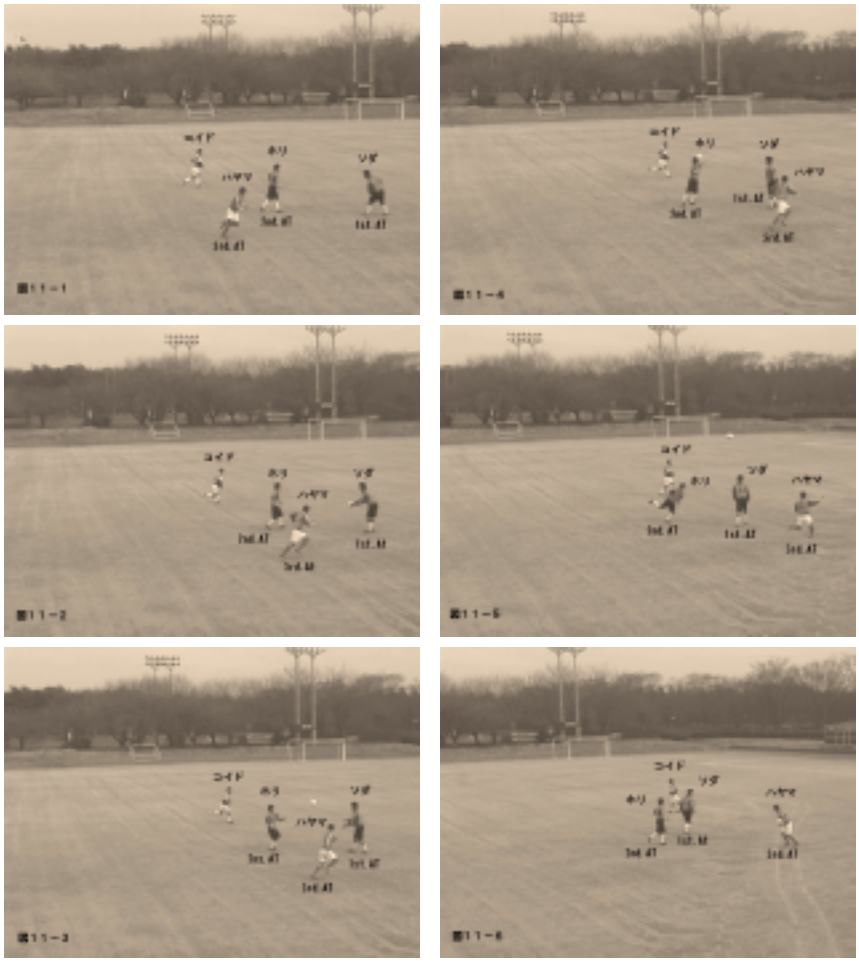

図11-1～11-6

図10-2～10-5。前方へ第3の動きをしたハヤマ(第3アタッカー）がボールをキャッチしている：**図10-6**。

10．攻撃方向に移動しながら行う(フットボール)

上記9を足で行う。

11．攻撃方向に移動しながらのサポートプレー(ハンドボールとヘディング)

右方向に攻撃している。ボールを手で保持したソダ（第1アタッカー）は後ろ向きで前方にプレーできない：**図11-1**。すかさずホリ（第2アタッカー）が後方からサポートしミラーとなって右側から前方に第3の動きをするハヤマ（第3アタッカー）へヘディングでボールを送っている：**図11-2～11-5**。第3の動きをしたハヤマ（第3アタッカー）が前方でボールをキャッチしている：**図11-6**。

12．攻撃方向に移動しながらサポートプレー(フットボール)

右方向に攻撃している。ボールを足で保持したソダ（第1アタッカー）はフィールドの中方向を向いていて，右サイドから第3の動きをするコイド（第3アタッカー）にパスができない：**図12-1**。ソダと対面するハヤマ（第2アタッカー）がミラーとなって，サポートし，ワンタッチで第3の動きをするコイド（第3アタッカー）に突破のパスしている：**図12-2～12-6**。

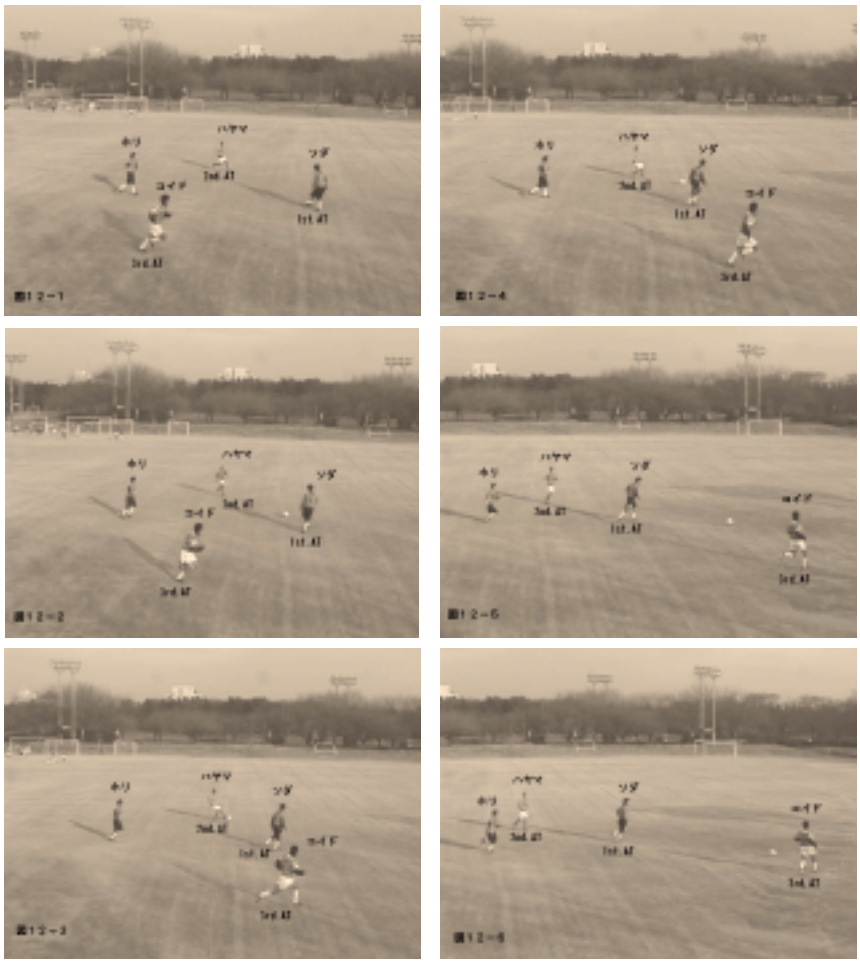

図12-1～12-6

13．攻撃方向に移動しながらポストプレー（ハンドボールとヘディング）

右方向に攻撃している。ボールを手で保持したコイド（第1アタッカー）はルックアップして前方の味方を探している。そこでハヤマ（第2アタッカー）が前方のスペースに走り出ている：**図13-1**。ポストとなったハヤマ（第2アタッカー）にコイド（第1アタッカー）がヘディングできるボールを渡す。このときソダ（第3アタッカー）は第3の動きをして左前方に動き出している：**図13-2～13-3**。ボールを受けたハヤマ（第2アタッカー）はヘディングで第3の動きをするソダ（第3アタッカー）にボールを送る：**図13-4～13-5**。第3の動きをしたソダ（第3アタッカー）がボールをキャッチする：**図13-6**。

14．攻撃方向に移動しながらポストプレー（フットボール）

右方向に攻撃している。ボールを足で保持したコイド（第1アタッカー）はルックアップして前方の味方を探している。そこにホリ（第2アタッカー）が前方のスペースに走り出ている：**図14-1**。ポストとなったホリ（第2アタッカー）にコイド（第1アタッカー）が縦パスを送る。このときソダ（第3アタッカー）は2人の間をすり抜けて右外側に第3の動きをし，反対方向にハヤマ（第3アタッカー）が同じく第3の動きをしている：**図14-2～14-3**。ボールを受けたホリ（第2アタッカー）は2人の第3の動きをするソダ（第3アタッカー）と

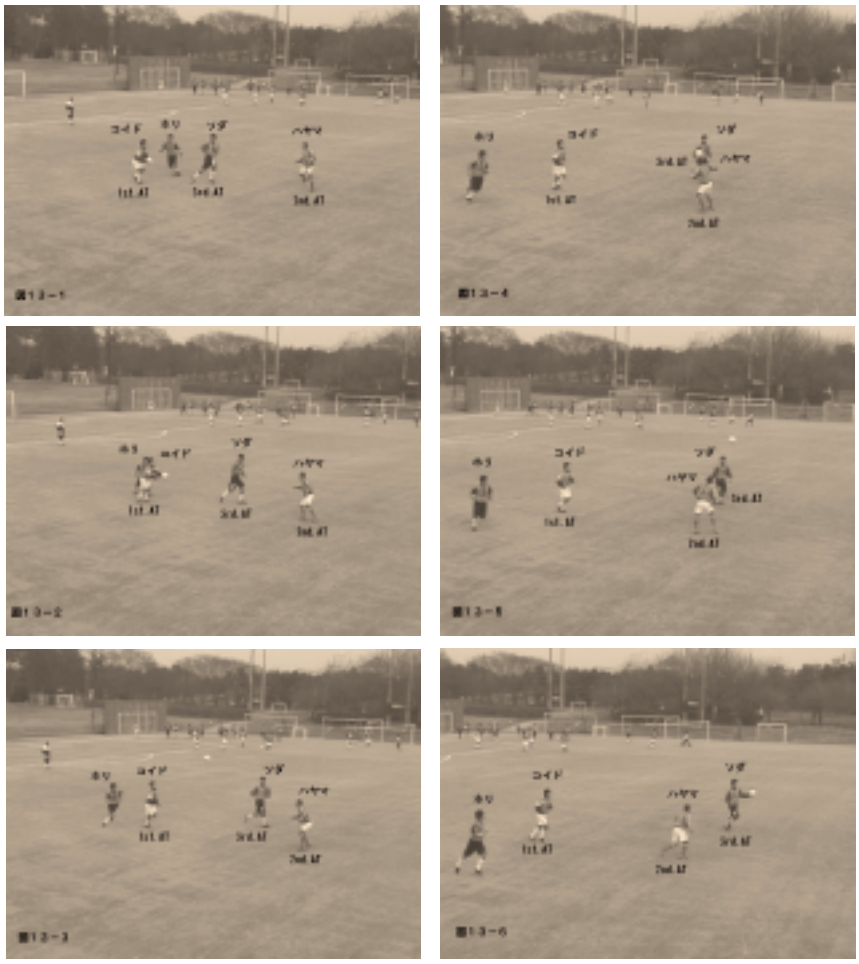

図13-1〜13-6

ハヤマ（第3アタッカー）へのパスの可能性を持った状態である。このときはハヤマにポストとなりワンタッチでボールを送っている：**図14-4〜14-6**。

Ⅳ　まとめ

以上の方法でこの攻撃パターンの指導は完結する。

この指導方法はこの3人の攻撃パターンの考え方の習得と状況判断の早さを引き出すものである。特に注意することは段階的に指導する点である。今回は第1アタッカーの一つ先を読んだパス，第2アタッカーのミラーパス，第3アタッカーの第3の動きをハンドボールとヘディングで行い，その後で上述の3ステップをフットボールで行ったが，それぞれのステップをハンドボールとヘディングで行った後すぐにフットボールで行う方法もある。特に若年層では後者の方法が効果的である。その理由は今回は大学生が対象であるため，この攻撃パターンの全体の概念を理解してから足でプレーする方法を採用した。若年層ではハンドボールとヘディングで学習した後，すぐに同じことを足で行った方が理解されやすい。また，今回は4人一組で行ったが，グループの人数には制限はない。ただし，あまり多いと学習効果はあがらない。4から5人が最も効果的である。

注

注1）ミラーパスの名称は第1アタッカーがボールを

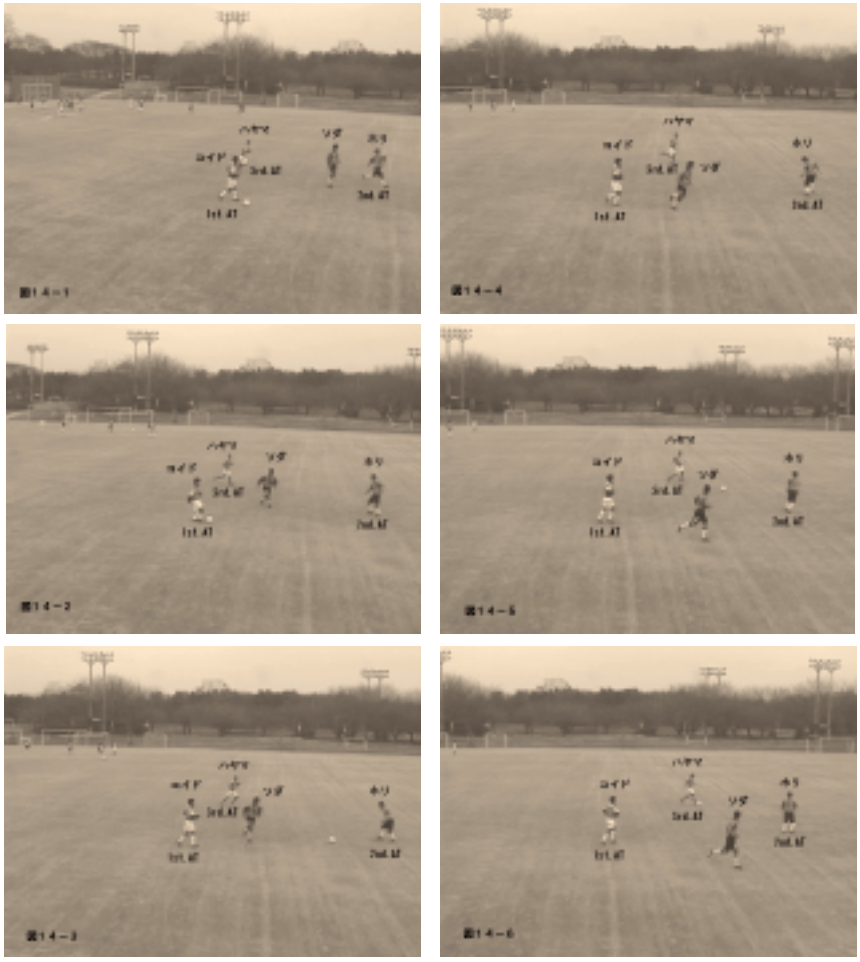

図14-1～14-6

送れない，あるいは見えない場所にいる第3アタッカーに第2アタッカーを介することにより見ることができる，あるいは渡すことができる，いわゆる鏡の効果を想定して名づけたものである。この3人のプレーパターンについては前出のチャールズ・ヒューズ氏に直接尋ねたところ，それはすべてウォールパス（壁パス）でまとめられるとの答えであった。

山中は彼の著書の中で背後の味方へのパスを送る方法の一つの方法として，味方を利用して送る方法をミラーパスと呼ぶとしている[9]。

参考・引用文献

1）Charles Hughes（1990）: The Winning Formula, William Collins Sons & Co Ltd, London，p96.

2）笠原成元（1985）：写真と絵で見るバスケットボール，新星出版，東京，pp45-47.

3）松本光弘（1993)：スキルブック　サッカー，学習研究社，東京，pp78-81.

4）松本光弘（1999）：サッカーの特殊技術の指導法の開発（その1）―ダイビング　ヘッド―，筑波大学体育科学系紀要　22，pp99-108.

5）松本光弘（1999）：サッカーの特殊技術の指導法の開発（その2）―オーバーヘッドキック―，サッカー医・科学研究　19，pp91-97．78-81.

6）松本光弘（1999）：サッカーの特殊技術の指導法の開発―ジャンピングサイドボレーキック―，筑波大学運動学研究　15，pp77-85．78-81.

7）松本光弘（2000）：サッカーにおける1対2のボール奪いの指導法に関する研究―ボールを積極的に奪いに行く方法について―，筑波大学体育科学系紀要　23，pp117-129．78-81.

8）ウイル・クーヴァー（1996）：攻撃サッカーのすべて，丸善，東京

9）山中邦夫（1980）：コーチ学（コンビネーションサッカー編），逍遥書院，東京，p248